關取千両幟脚本

一之巻

704
522

088626-000-9

特52-597

関取千両幟　1の巻

近松　半二／原著

M27

DBJ-0285

關取千両幟脚本一の巻

故　近松半二、原作

岡野美春　補綴

猪名川　北野屋七兵衛

女房　音羽　見物人太兵衛

鐵ヶ嶽陀太右衛門　大阪屋使一人

呼　使一人

本舞臺平舞臺上手折回し障子家体正面鼠壁次ぎ納戸口暖簾ゝ掛け例の處に門口あり下手米俵酒樽等の積物羽織脇差の贈びらの書割總て猪名川仮住居の体幕の内より北野屋七兵衛太兵衛の両人ゝ積物を見て居る此みへよろしく鳴物にて幕あく

七「扨積だゝ〳〵見事じやあァ何じや羽織照差米もありゐらいはずみじやの
太「イヤ又二三年こつちの相撲よめつたゞ負た事のない猪名川シタガ今度の相
　撲ゞゝ千田川ゞ病氣ゆへむづむまいと思ふたらおもひの外きついはづみ
七「ソリヤ其筈いの勘進元の良ゝよし江戸方九州方殘らず登り猪名川といふ最
　負の強い力の強いわんあ男を持ものゝ顔が見たい　ト表より内を覗く
　此時納戸の内より女房音羽出來り出合頭ゞにつこり笑ひ
音「ヲヽ是ゝ〳〵島の内の七兵衛さんようお出お連の衆もサア〳〵こゝへ
七「扨マァきついもづみゃう千田川ゞ出ぬもへどふあらふと思ふたが近年の大
　入今日ゝ大方あゝの關取がとらゝやるであらふと思ふて見物ゞ來たついで
　ながら一寸悦びに寄ましたカ關取ゝもう往てかへ
音「イヱ〳〵あふゝ叶ゝぬ用事ゞつきつひ近處まで出られましたもう戻つてで
　どざんせうマァ日外ゝいかい御世話で練物を緩りと見物致しまして忝ふ御
　座り升いつでも島の内の祭りゝ俄が多ふて賑やかお事ゞたしらゝ在所者も

へ物見高いとこちの人ゞ呵られ升
七「イヤモこちらの方も門がざわつく斗で奉公人がいでかぬゝ肝心の商ひゞ少
　ないヤ斯いふ中ゞ遲あつさら這入れまい關取ふよいやうゞ頼ミ升
音「ヲヽせゝしないマァ御緩りとおさりませぬ
七「イヤ遲いとよい場がどざりませぬ
太「左樣なれバお暇致し升　ト七太の兩人ゝ門口へ出て
七「サア行ませう　ト連立下手へ這入る向ふゝり猪名川鐵ケ嶽と打連れ出
　來り直ぐ本舞臺へ行き門口をあけ
猪音「女房共今戻つた　ト猪鐵の兩人ゝよき處に住ふ
「ヲヽこちの人戻らしやんしたか陀太右衛門樣ようお出初日からまだお目ゞ
　掛りませぬがきつい大入でお目出度どざり升
鐵「ソリヤもう亙ひでどんす見物の足ゞ早さゞそろ〳〵行ふと出掛た道で猪名
　川ゞ逢たにようてうれでちよつと寄ました
音「夫ゝ〳〵ようおそお出シタかまだやつと今の先檜太皷を打出しましたマァ
　緩りとお茶なりと　ト茶を汲で持出る
猪「コリヤ女房共留守の内へ今日の角力割はてなんたか

音「イエ〳〵まだ何にも持つてゝ

猪「ハテ埒の明ぬ今迄しれぬゝ何ぞもめでも有かいの陀太右衛門

錢「サアおれも初日に鈍な相撲を取つたによつて何でも今日ゝと思ふて居るか誰と合てか相人によつてゝこんたんも工夫もして見にやあらぬいつそ聞にやらふかい

音「ハテまアようどんす其内に持てこふ幸ひ貴ふさ肴もあり主と一所に飯あがつて行きやしやんセドレ拵へやうわいあア　ト音羽ゝ納戸へ這る下手

使「猪名川様ゝお宿ゝ御座り升か新町の大阪屋から参り升た佐右衛門申升錦太夫が身受の跡金今日中に遣されませちとこちらに身受の客衆が御座り升ゆへ其方へ相談致しますお前のお顔を立まして今日中ゝ待まとあすにあつたらこちらへ太夫をやります程ゝ其時意地苦地のないやうに念を入れいと申されましさ　トいひ捨下手へ這入る

關取千両幟　脚本一の卷　終

明治廿七年四月十五日印刷
同　廿七年四月廿一日發行　（定價六錢）

著作者　大阪府西成郡曾根崎村番外十八番屋敷　岡野美春
兼發行者

印刷者　同市南區饅谷西之町二百五十三番屋敷　南谷新七

版權
興行權
所有